

# 児童作文の語彙に関する計量的研究

中 田 敏 夫

## はじめに

国語研究所（一九八九）では、産出語彙（幼児・児童が自ら話しことば・書きことばの中で使用した語彙）に関する研究の現況を、

- ① 幼児期の話しことばを対象とするものが多い。
  - ② 児童期の産出語彙の研究・資料が不十分。
  - ③ 書きことばを対象とした産出語彙研究の不足。
- とまとめ、産出語彙の研究の必要性を説いている。その上で、実際に書かれた作文の使用語彙を通して産出語彙に関する資料を充実すると同時に、計量語彙調査の方法により児童の語彙使用の具体相を明らかにするという研究目的のもとに、同書を編集している。

中田（一九九二）は、これと全く同じ問題意識に立ち、児童が実際に使用した作文語彙の全体を語彙表として提示した。し

かしその際語彙表データに基づく分析を試みていなかった。本稿では、児童の言語使用過程がどのように変化し、言語能力がいかに関達するかという観点から、児童の作文語彙の計量的分析を行うことにする。

## 一 資料の概要

資料は、一九八七年七月（夏休み直前）、石川県石川郡美川町立湊小学校（実施時児童総数280人）、同美川小学校（実施時児童総数432人）の2校の全校生徒を対象に実施して得られている。美川町は金沢市から西へ20km、人口1万余、旧湊村、美川村、蝶屋村が合併してできた町である。

作文は1授業時間中に以下の指示のもとに書いている。

- ① テーマの違いにより生じる文体上の差を防ぐため、「ぼくのゆめ」「わたしのゆめ」という統一題目での課題作文にする。
- ② 分量としては3年生以上は四百字詰め原稿用紙1枚を、1・

4 年		5 年		6 年		総異なり語数 総延べ語数
1 作文 あ	全111作文	1 作文 あ	全137作文	1 作文 あ	全135作文	
10.75	1,194	11.64	1,596	9.01	1,217	3,120
57.55	6,389	65.68	8,999	45.24	6,108	29,212
6.50	722	7.20	987	5.54	749	2,135
25.18	2,795	29.55	4,049	20.89	2,821	13,201
2.12	236	2.31	317	1.72	233	540
18.90	2,099	22.05	3,021	15.17	2,049	9,708
1.66	185	1.74	239	1.42	193	374
9.98	1,108	10.80	1,480	7.29	985	4,831
0.45	51	0.38	53	0.31	42	71
3.48	387	3.27	449	1.87	253	1,472

2年生は特別に留意したます目の大きい百字詰め用の紙1枚を目安とする。ただし、それにこだわらず、書けるものは何枚でも書いてよいことにする。

③ 作文である以上読み手を想定することになるが、読むのは全児童が同じ程度の改まりの気持ちを持って叙述するであろう「担任の先生」のみであることを児童に知らせる。

④ 資料の統一性を保つため、担任の先生は作文を書かせるに当たって特別な指示(例えば、丁寧に書くこと、できるだけ大きな夢を書くこと、など)を与えないことにする。

得られた学校別、学年別、男女別の人数(作文数)を簡単にまとめておく。総数695人、内学校別では湊小268人(回収率96%)、美川小427人(回収率99%)、学年別では1年(94人)、2年(116人)、3年(102人)、4年(111人)、5年(137人)、6年(135人)、男子346人、女子349人である。

## 二 調査結果と分析

国語研究所(一九八九)の指摘の通り、産出語彙の研究が不十分な状況といえる中、井上(一九八四)は、児童作文の語彙に関する貴重な調査研究を行っている。井上(一九八四)は資料を次のような形で採っている。

(1) 横断的調査として、1小学校の児童全員に対して課題を与え、1校時の時間内に書かせる。

〈表1〉 語彙量の発達

品 詞		1 年		2 年		3 年	
		1 作 文 あ	94作文	1 作 文 あ	116作文	1 作 文 あ	102作文
全 体	異なり語	2.43 <sup>語</sup>	229	5.74	666	8.17	834
	延べ語	9.36	880	25.12	2,915	38.44	3,921
体 類	異なり語	1.47	139	3.46	402	4.99	509
	延べ語	4.84	455	11.28	1,309	17.37	1,772
用 類	異なり語	0.48	46	1.17	136	1.53	157
	延べ語	3.05	287	8.22	954	12.72	1,298
相 類	異なり語	0.36	34	0.91	106	1.32	135
	延べ語	1.08	102	4.39	510	6.33	646
その他	異なり語	0.10	10	0.18	22	0.32	33
	延べ語	0.38	36	1.22	142	2.00	205

(2) 文章様式の相関を考察するために、記事的文章として、課題「べんきょう」、叙事的文章として課題「日曜日のできごと」を同一児童に書かせる。

これは、設定テーマの違いを除き、中田(一九九二)と全く同じ方法での産出語彙の調査研究方法である。したがって、分析にあたり、井上(一九八四)の結果と比較考察することができるよう、全面的に同論文の方法に準じた形で議論を進めたい。比較することで互いの資料の性格をよりよく位置付けることができると同時に、井上(一九八四)が、児童の用いる使用語の実態を観察・記述した上で「それを積み重ねて行くことが最重要課題」と述べているように、児童の語彙の研究を発展・継続させていく上でも考察の視点をそろえておくことが必要であると考えたからである。

井上(一九八四)は考察の観点を以下のように示している。

1 品詞的観点からみた考察

- (1) 学年の発達と一文における語彙の総数の変化
- (2) 学年の発達と品詞別にみた作文の語彙構造の変化
- (3) 文章様式の異なりと品詞別にみた語彙の量的構造
- (4) 語彙の分布と全体の構成の仕方
- (5) 文章様式を支える語彙の構造
- 2 拡充的観点からみた考察

(6) 学年の発達に伴った語彙の出現(いわゆる初出語)

(7) 学年間にわたる語彙(いわゆる共出現語)

本稿でも、これら観点について順に考察を加えることにする。

なお文章様式として、井上（一九八四）は、「べんきょう」を記事的文章（説明的文章）、「日曜日のできごと」を叙事的文章（物語的文章）として位置付けている。文章ジャンルとしてはともにいわゆる「生活文」であり、文章の機能からいってともに「表出・創作」にあたると思われる。また本稿で設定した「ぼくのゆめ・わたしのゆめ」も「生活文」であり、「表出・創作」であると考えられるが、三者は、「詩・創作・感想」などの「表出・創作」と、また「記録・報告文」、「説得・論説文」、「日記文」、「手紙文」などは性格の異なった文章様式である。<sup>(注)</sup>したがって「べんきょう」は「日曜日のできごと」に比べより記事的・説明的であり、逆に「日曜日のできごと」は「べんきょう」に比べより叙事的・物語的という理解にとどめ、その上で、「ぼくのゆめ・わたしのゆめ」がどのような語彙の特徴を示すかを比較対照し、文章様式としての位置付けを考へることにしたい。

二・一 品詞的観点から見た考察

ここでいう品詞とは、『分類語彙表』（国立国語研究所）の4分類（体の類、用の類、相の類、その他の類）の<sup>(注)</sup>ことをさす。

二・一・一 語彙量の学年別発達傾向

学年が進むにつれて語彙量がどのように変化するかをみる

ものである。表1参照。

井上（一九八四）ではこの項の最初で「文数の発達」について触れているが、中田（一九九一）で既に「ぼくのゆめ・わたしのゆめ」（以下『夢』）についてのデータ並びに分析を示しているのが割愛する。ただ、『夢』では、学年発達とともに増加していたものが6年で減少する姿を示しており、井上（一九八四）と比較した場合、「べんきょう」（以下、記事文）と同じタイプになった。

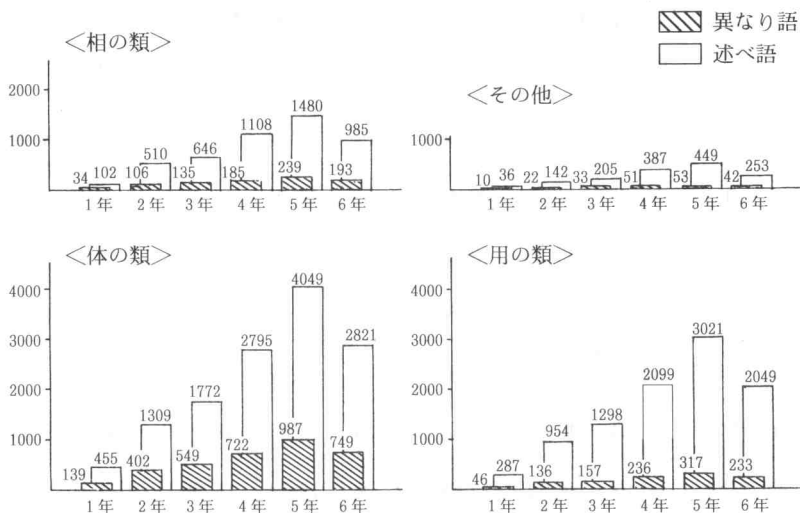
記事文、「日曜日のできごと」（以下、叙事文）、『夢』の1作文あたりの全体の結果をまとめれば次の通りである。

異なり語数		1年 2年 3年 4年 5年 6年					
記事文	9.2	10.2	18.2	19.5	22.2	18.9	
叙事文	15.5	20.2	27.9	34.3	39.4	41.2	
『夢』	2.4	5.7	8.1	10.7	11.6	9.0	
延べ語数	42.5	62.5	106.6	125.6	162.2	132.8	
記事文	62.9	81.5	139.6	177.0	187.9	208.9	
叙事文	9.3	25.1	38.4	57.5	65.6	45.2	
『夢』							

延べ語数を比較すると明らかなように、『夢』の文章量がかなり少ない。これは文章様式の反映というよりも、執筆状況、執筆態勢、執筆態度などの質の違いからくるものであろう。例えば、執筆時期をとれば、記事文は十一月、叙事文が三月で、1年生の場合、入学して記事文は8カ月、叙事文は11カ月たつての執筆となる。一方『夢』は七月執筆なので、入学後4カ月目のやっと文字が書けるようになっての作文である。この他、作文指導の状況、児童の居住地などの教育環境、児童の作文力、執筆の動機付けとそれに伴う執筆態度といった、様々な違いが影響を与えているものと考えられる。『夢』の1作文あたりの異なり語数の低さは、上記に加え、作文数の多さが関係している（1学年あたり、記事文・叙事文は50、『夢』は100あまり）。

したがって、ここでは学年の動きをみることにする。1作文あたりにおいて、記事文では異なり語数、延べ語数ともに低学年から中学年にかけて著しく増加した上で5年がピークをみせ、6年になり下がるのに対し、叙事文では異なり語数、延べ語数ともにほぼ同様な比率で発達する。『夢』では、前述の通り1作文あたりの数値が井上（一九八四）に比べ非常に小さくなっているが、動きとしては、延べ語数で1年から2年にかけて、また3年から4年にかけて大幅な増加がみられるものの、記事文と同様、異なり・延べ語数ともに学年に連れて上がったものが6年になり下がるといった姿をみせる。

学年間の相関関係を品詞別にみるために、表1をグラフ化し



〈図1〉 語彙量の品詞別発達

て、図1に示す。品詞別にみた場合でも全体の動きとほぼ同様である。ただ、『夢』では異なり語数でも1年から2年にかけては飛躍的に増えている。延べ語数では1年から2年にかけて、3年から4年にかけての2段階の発達段階を示している。この傾向の著しいのが、相の類である。

## 二・一・二 品詞構成比

語彙の発達を各学年における品詞構成比の構造によって捉えれば、表2のようになる。

井上(一九八四)は、各学年における語彙の品詞構成比は学年の進級にかかわらずほぼ一定していることを指摘している。この点は表2にみるように、『夢』でも同じであり、異なり語・延べ語数ともに各学年ほぼ同様の比率となっている。

記事文・叙事文・『夢』の各学年での平均値(%)は次の通りである。

	記事文			叙事文			『夢』		
	異なり(延べ)	用(延べ)	相(延べ)	異なり(延べ)	用(延べ)	相(延べ)	異なり(延べ)	用(延べ)	相(延べ)
	54.1 (46.5)	22.6 (29.2)	19.2 (19.9)	62.1 (49.8)	21.7 (33.6)	13.0 (11.9)	60.9 (46.1)	19.6 (33.2)	15.5 (15.9)
	3.9 (4.3)	3.0 (4.5)	3.7 (4.8)						

<表2> 作文の語彙の品詞構成比(%)

品詞 学年	体の類			用の類			相の類			その他の類		
	異なり	な語	延べ語	異なり	な語	延べ語	異なり	な語	延べ語	異なり	な語	延べ語
1年	60.69		51.70	20.08		32.61	14.84		11.59	4.36		4.09
2年	60.36		44.90	20.42		32.72	15.91		17.49	3.30		4.87
3年	61.03		45.19	18.82		33.10	16.18		16.47	3.95		5.22
4年	60.46		43.74	19.76		32.85	15.49		17.34	4.27		6.05
5年	61.84		44.99	19.86		33.57	14.97		16.44	3.32		4.98
6年	61.54		46.18	19.14		33.54	15.85		16.12	3.45		4.14
学年平均	60.98		46.11	19.68		33.06	15.54		15.90	3.77		4.89
学年全体	68.42		45.19	17.30		33.23	11.98		16.53	2.27		5.03

『夢』の学年平均値は、体の類・相の類が記事文と叙事文のちよūdと真ん中、用の類・その他がほぼ同じという結果であることがわかる。MVR<sup>(注3)</sup>の考え方を用いれば、記事文がよりありさま描写に、叙事文がより動き描写に、そして『夢』がその中間の性格をもつとってよいか。

なお、異なり語数と延べ語数の関係を学年全体でみた場合、次のように三者はほぼ共通した結果となる。

記事文	体			
	異なり(延べ)	用	相	その他
60.6 (46.1)	67.1 (49.0)	20.8 (29.8)	15.0 (19.7)	3.4 (4.2)
叙事文	体			
	異なり(延べ)	用	相	その他
68.4 (45.1)	17.3 (33.2)	11.9 (16.5)	2.2 (5.0)	

異なり語数が全体に占める割合からみて、延べ語数が、体の類では減少し、用の類で増加、相・その他の類ではほぼ同数という結果になっている。井上(一九八四)では、児童読み物を調査した野村(一九七九)、『現代雑誌九十種の用語用字』の品詞構成比と比較し、成人の読み物としての雑誌の語彙に比べ、作文の語彙と児童の読み物の語彙が近似することを指摘しているが、本稿の結果はこれをさらに確認するものとなっている。

## 二・一・三 使用度数分布

異なり語数と延べ語数との関係について考察する。表3は異なり語数を使用度数の段階毎に示したものである。井上(一九八四)によれば、頻度1の語は、記事文で学年平均47%、叙事文で学年平均52%、学年が進むにつれて徐々にその比率は増加している。『夢』では表3から学年平均を算出すると73.6%となり、記事文からは7%近く、叙事文からも2%近く上回っていることがわかる。頻度3の語までを低頻度語として井上(一九八四)は捉えているが、これによれば記事文では全体で69%、叙事文では72%、そして『夢』ではさらに上回り、73%となる。三つの作品群は、頻度3まででともに7割以上を占める点で児童作文の共通の特徴を指摘できようが、なかでも『夢』の低頻度語彙の比率が高いことに気付く。

総異なり語数を品詞別に分類し、使用度数の段階毎に示したものが表4である。

頻度1の比率、頻度3の語までを含んだ比率を次に示す。

記事文	頻度1の比率			
	体	用	相	その他
47.1	49.7	47.1	47.1	47.1
叙事文	頻度1の比率			
	体	用	相	その他
43.5	41.2	46.4	41.2	41.2
『夢』	頻度1の比率			
	体	用	相	その他
43.3	39.8	46.8	55.9	30.9

3 年		4 年		5 年		6 年	
異なり数	比率	異なり数	比率	異なり数	比率	異なり数	比率
450	53.95	637	53.35	828	51.87	670	55.05
121	14.50	165	13.81	244	15.28	163	13.39
63	7.55	88	7.37	136	8.52	112	9.20
68	8.15	99	8.29	138	8.64	83	6.82
58	6.95	89	7.45	109	6.82	84	6.90
40	4.79	62	5.19	68	4.26	63	5.17
15	1.79	21	1.75	28	1.75	11	0.90
17	2.03	28	2.34	33	2.06	24	1.97
1	0.11	4	0.33	8	0.50	6	0.49
1	0.11	1	0.08	4	0.25	1	0.08
834	100.00	1,194	100.00	1,596	100.00	1,217	100.00

	頻度3の語まで	体の類	用の類	相の類	その他
記事文		72.7	67.8	60.4	63.5
叙事文		73.5	63.9	68.2	70.2
『夢』	77.7	69.0	59.8	56.3	

井上(一九八四)は体の類が他の類に対して比率が高いことを指摘すると同時に、叙事文の方が「低頻度の語が多く、それだけ語彙の広がり大きい」ことを、そして記事文の方が用の類だけが低頻度の語彙が多くなっていることより、記事文の「対象をどのように把握し、どのような評釈を施していくか、用言としての語彙的な広がりがある」ことを述べている。

『夢』でも体の類の比率が他の類より高くなっている点は同様だが、頻度1でも頻度3の語まででも井上(一九八四)の、二つの作品群に比べかなり上回っているところに特徴がある。

また用言も同様にかかなり上回っている。しかし、相の類では記事文並み、さらにはその他では大幅に下回っている。『夢』は児童ひとりひとりが描く将来の「夢」である。その「夢」がそれほど類型化されずに、対象世界のもの・ことの広がり、及びそれを把握・展開するうごきの世界の広がりをもって、表現されていると考えてよからう。その結果、体の類、それを受け



<表3> 異なり語の度数分布表 一学年別—

学年 度数	1 年		2 年		3 年	
	異なり語数	比率	異なり語数	比率	異なり語数	比率
1	1,618	51.85%	123	53.71	365	54.80
2	446	14.29	34	14.84	97	14.56
3	234	7.50	19	8.29	54	8.10
4～5	219	7.01	21	9.17	55	8.25
6～10	227	7.27	21	9.17	47	7.05
11～20	160	5.12	6	2.62	28	4.20
21～30	50	1.60	2	0.87	7	1.05
31～100	123	3.97	2	0.87	11	1.65
101～200	21	0.67	1	0.43	1	0.15
201～	22	0.70	0	0	1	0.15
計	3,120	100.00	229	100.00	666	100.00

<表4> 異なり語の度数分布表 一品詞別—

品詞 度数	体の類		用の類		相の類		その他の類	
	異なり語数	比率	異なり語数	比率	異なり語数	比率	異なり語数	比率
1	1,194	55.92%	253	46.85	149	39.83	22	30.98
2	307	14.37	81	15.00	45	12.03	13	18.30
3	160	7.49	39	7.22	30	8.02	5	7.04
4～5	151	7.07	38	7.03	28	7.48	2	2.81
6～10	138	6.46	46	8.51	32	8.55	11	15.49
11～20	92	4.30	27	5.00	34	9.09	7	9.85
21～30	25	1.17	15	2.77	8	2.13	2	2.81
31～100	52	2.43	25	4.62	41	10.96	5	7.04
101～200	8	0.37	6	1.11	5	1.33	2	2.81
201～	8	0.37	10	1.85	2	0.53	2	2.81
計	2,135	100.00	540	100.00	374	100.00	71	100.00

て事態の実現を図ったりする用の類がバリエーション豊かに使用されているものと思われる。その一方で、主に事態の様子を描出する相の類・その他の類は特定の範囲内の、限られた語彙を多用することになる。これらの点が記事文、叙事文と『夢』を分っている点である。

次に、使用度数分布をみることで高頻度の語がどうなっているのかを考察する。表5は6学年間の全体の累積使用率の伸びを示したものである。井上(一九八四)が記事文、叙事文ともに「上位25位までに位置する異なり語数によって50%以上の累積使用率を示すことを指摘しているが、『夢』でもほぼ同様の結果となった。わずかな語数で全体の半数以上を占めることがわかる。

ただ、体の類は次のように25位までで記事文47.1%、叙事文30.1%と、開きがみられるのに対し、『夢』は6.6%でちょうど二つの作品群の中間的な性格を見せる。

	異なり語数25位までの語が延べ語数に占める割合			
	体の類	用の類	相の類	その他
記事文	47.1%	72.3	57.4	92.7
叙事文	30.1	60.9	53.8	87.1
『夢』	39.6	74.7	53.2	93.2

上位25位までに位置する具体的な語は表6の通りである。この表より、記事文、叙事文、『夢』の三者が各類で、互いに共通する語数を挙げれば、次の通りである。

	体の類	用の類	相の類	その他	計
三者共通	9語	13語	8語	10語	40語
記事文と『夢』	3語	5語	6語	2語	16語
叙事文と『夢』	0語	3語	5語	1語	9語
計	12語	21語	19語	13語	65語

『夢』の高頻度語彙各類計100語の内、三者共通が40語にもなっている。また、記事文あるいは叙事文との共通を含めると65語になり、三者の共通度の高さがよくわかる。『夢』が記事文と共通するのが16語、叙事文とが9語であることから、どちらかといえば、『夢』は記事文に近い結果といえるか。

品詞別では、用の類、相の類が計で21語、19語と共通する傾向をみせるのに対し、体の類、その他の類が比較的低い。用の類は特に高いが、この『夢』の25語の内、国語研究所(一九六四)の現代雑誌九十種の動詞の高頻度語上位20番までに入っているのは12語ある(なる・する・思う・いる・見る・言う・ある・行く・やる・できる・来る・出る)。これより、動詞の高頻度語については成人の書きことばと共通度がかなり高いことがわかる。一方、体の類は6語(こと・人・とき・今・もの・それ)、相の類5語(いい・大きい・ない・その・まだ)、その

〈表5〉 使用率分布

〈体の類〉

異なり語 の順位	延べ語数に 占める割合	延べ語数 の伸び
5位	18.14%	2,418語
10	27.56	3,673
25	39.66	5,284
49	51.79	6,900
100	62.18	8,285
151	68.25	9,093
203	72.67	9,683
277	77.86	10,374
381	82.82	11,035
942	100.00	13,323
総異なり語数		2,135語

〈用の類〉

異なり語 の順位	延べ語数に 占める割合	延べ語数 の伸び
5位	47.15%	4,602語
10	59.54	5,811
25	74.78	7,298
49	84.13	8,211
98	91.24	8,905
145	94.64	9,236
207	97.40	9,506
288	100.00	9,759
総異なり語数		540語

〈相の類〉

異なり語 の順位	延べ語数に 占める割合	延べ語数 の伸び
5位	22.52%	1,083語
10	33.22	1,598
25	53.21	2,559
50	72.82	3,502
100	88.50	4,256
151	95.03	4,570
226	100.00	4,809
総異なり語数		347語

〈その他の類〉

異なり語 の順位	延べ語数に 占める割合	延べ語数 の伸び
5位	66.06%	956語
10	80.23	1,161
23	93.29	1,350
51	100.00	1,447
総異なり語数		71語

<表6> 上位25位までの高頻度語

体の類			用の類			相の類			その他の類		
順位	見出し語	頻度	順位	見出し語	頻度	順位	見出し語	頻度	順位	見出し語	頻度
①	わたし	698	①	なる	2372	①	いい	354	①	そして	331
②	ぼく	604	②	する	737	△②	好きだ	208	②	でも	317
△③	先生	418	③	思う	594	□③	大きい	185	③	だから	119
④	こと	389	□④	いる	585	④	ない	178	△④	それに	104
5	夢	309	⑤	見る	314	⑤	その	158	△⑤	もし	85
⑥	人	294	⑥	言う	299	□⑥	いっぱい	116	⑥	やっぱり	67
7	将来	290	⑦	ある	280	□⑦	たくさん	107	⑦	それから	41
8	選手	277	□⑧	作る	213	□⑧	小さい	100	8	だって	37
⑨	とき	198	⑨	行く	210	⑨	はやい	98	⑨	だけど	36
10	今	196	□⑩	やる	207	△⑩	もっと	94	□⑩	それで	24
11	野球	164	11	なれる	157	⑪	いろいろだ	84	11	それと	23
□⑫	みんな	150	△⑫	がんばる	152	⑫	うまい	83	□⑫	そしたら	19
13	保母さん	124	□⑬	できる	149	□⑬	おもしろい	75	12	けど	19
14	子供	112	14	あげる	122	△⑭	なぜ	74	14	もしも	17
15	わけ	109	⑮	来る	107	15	いろんな	73	□⑮	また	16
16	おとな	106	□⑯	出る	103	□⑯	楽しい	68	15	できれば	16
□⑰	もの	100	△⑰	教える	100	△⑰	大好きだ	65	□⑰	なんだか	13
18	ピアノ	98	□⑱	入る	99	△⑱	いちばん	64	18	きっと	12
□⑲	おかあさん	96	△⑲	書く	87	19	どうして	59	□⑲	それでも	9
19	仕事	96	20	しれる	84	20	やさしい	56	19	できたら	9
△⑳	自分	93	21	もらう	80	21	いつも	55	21	なんか	8
21	サッカー	93	△㉑	わかる	80	△㉑	いやだ	53	22	それか	7
△㉒	学校	91	⑳	遊ぶ	62	23	すごい	52	22	なぜなら	7
24	看護婦	90	△㉔	習う	53	□㉔	まだ	51	22	たぶん	7
⑳	それ	89	㉕	買う	52	25	かっこいい	49	22	もちろん	7

(注) 順位の○印は記事文・叙事文と共通する語。

△印は記事文と、□印は叙事文と共通する語。

他の類4語(そして・もし・やっぱり・もちろん)と、かなり  
 ずれがみられる。ただ、このことは逆に、児童の作文三者の共  
 通度の高さを示すことにもなる。

## 二・二 拡充的観点からみた考察

### 二・二・一 初出語

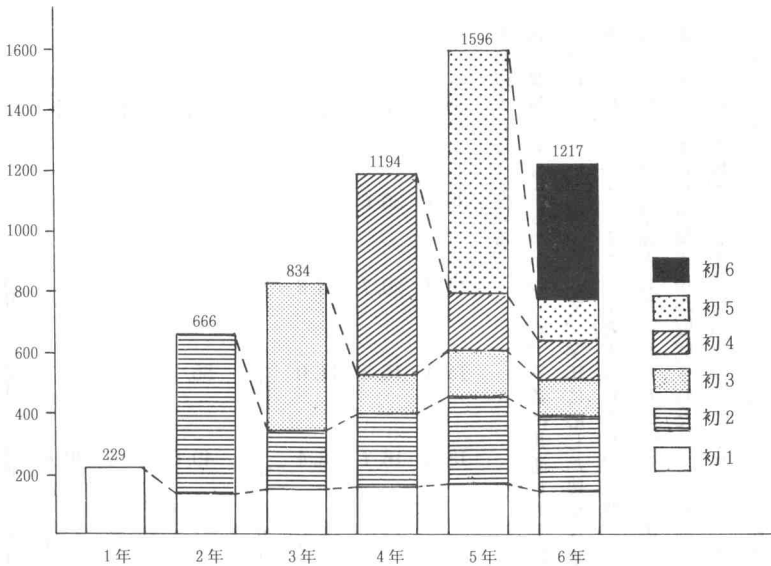
表7は各学年において、異なり語・延べ語数に占める初出語  
 の割合を示したものである。1年生では全てが初出語であり、  
 2年生以後新たに出現する語がどのように変化するのかが理解  
 できる。

図2は学年別の初出の語の構成を図で示したものが、国語  
 研究所(一九八九)の結果と酷似しており、同書の指摘と同様  
 のことがいえよう。すなわち、  
 ・初出の語がその学年全体で占める割合は学年を追う毎に減少  
 する。

・ある学年での初出語はその学年では大きな割合となるが、そ  
 れ以降ではほぼ一定の割合で低くなる。

『記述文・叙事文・『夢』の各学年における初出語の割合を示  
 せば、次頁の下の通りである。

この一覧から、まず異なり語数を考えた場合、記事文より叙  
 事文の方が初出率が高くなっていることがわかる。2年・3年  
 で半数以上が、4・5・6年でも半数近くが初出のものとなっ  
 ている。『夢』はさらに初出率が高く、6年を除きほぼ半数か



〈図2〉 学年別の初出の構成

( ) は各学年の初出語の実数

4 年	5 年	6 年	計
61.91 <sup>%</sup> (447)	55.11 <sup>%</sup> ( 544)	44.99 <sup>%</sup> (337)	100 <sup>%</sup> (2,135)
23.93 (669)	19.23 ( 779)	15.80 (446)	26.27 (3,469)
46.18 (109)	45.42 ( 144)	30.47 ( 71)	100 ( 540)
8.28 (174)	8.37 ( 253)	5.22 (107)	11.69 (1,135)
46.48 ( 86)	38.49 ( 92)	13.98 (27)	100 ( 374)
10.83 (120)	10.06 ( 149)	4.77 ( 47)	14.75 ( 713)
33.33 ( 17)	22.64 ( 12)	14.28 ( 6)	100 ( 71)
5.94 ( 23)	4.45 ( 20)	2.37 ( 6)	8.28 ( 122)
55.19 (659)	49.62 ( 792)	36.23 (441)	100 (3,120)
15.43 (986)	13.34 (1,201)	9.92 (606)	18.61 (5,439)

異なり語 2年 3年 4年 5年 6年

記事文 54.6 54.0 45.3 40.6 35.4

叙事文 65.8 54.4 48.9 46.4 44.5

『夢』 78.5 57.0 55.1 49.6 36.2

延べ語 2年 3年 4年 5年 6年

記事文 18.7 16.8 11.0 8.4 7.4

叙事文 30.6 20.7 15.5 16.7 14.4

『夢』 35.1 18.8 15.4 13.3 9.9

らそれ以上となっている。

同一課題であるにもかかわらず、三者に共通して半数前後が初出語になっていく理由として、学年に応じた豊かな語彙表現が獲得されていっていることが考えられるが、『夢』が最も高くなった背景には、話題としてそれぞれの学年で自由な設定が可能であり、多彩な語彙表現が展開されたことがある。

一方、延べ語数をみると、初出語の占める割合は三者共通して一部を除き20%以下という結果である。この点を初出語の度数分布で考えるとはっきりする。表8は初出語の度数分布表だ

〈表7〉 各学年における初出語の割合

		1 年	2 年	3 年
体の類	異なり語数	% 語 100 (139)	% 82.83 ( 333)	% 65.81 (335)
	延べ語数	100 (455)	45.91 ( 601)	29.28 (519)
用の類	異なり語数	100 ( 46)	72.79 ( 99)	45.22 ( 71)
	延べ語数	100 (287)	21.59 ( 206)	8.32 (108)
相の類	異なり語数	100 ( 34)	75.47 ( 80)	40.74 ( 55)
	延べ語数	100 (102)	39.41 ( 201)	14.55 ( 94)
その他	異なり語数	100 ( 10)	50 ( 11)	45.45 ( 15)
	延べ語数	100 ( 36)	11.97 ( 17)	9.75 ( 20)
計	異なり語数	100 (229)	78.52 ( 523)	57.07 (476)
	延べ語数	100 (880)	35.16 (1,025)	18.89 (741)

〈表8〉 初出語の度数分布表

比率 度数	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
1	66.54%	75.99%	78.02%	75.85%	85.05%
2	14.93	12.52	12.37	14.28	7.93
3	8.31	5.42	4.65	6.00	4.24
4	3.40	2.71	2.03	2.49	1.66
5	1.32	1.04	1.31	0.45	0.55
6以上	5.48	2.29	1.60	0.90	0.55

が、頻度1と2のもので90%ほどを各学年とも占めることがわかる。これは記事文、叙事文でも全く同様で、使用度数の低いものが初出の中心になっていることがよくわかる。そんな中で、

( ) は共出現語の実数

3 学年間共通	2 学年間共通	1 学年のみ	計
6.97 % ( 149)	15.50 % ( 331)	68.29 % (1,458)	100 % ( 2,135)
8.15 (1,076)	8.49 (1,121)	14.46 (1,909)	100 (13,201)
9.81 ( 53)	14.62 ( 79)	56.11 ( 303)	100 ( 540)
2.95 ( 287)	2.35 ( 229)	3.85 ( 374)	100 ( 9,708)
8.02 ( 30)	14.17 ( 53)	51.06 ( 191)	100 ( 374)
3.49 ( 169)	3.72 ( 180)	5.67 ( 274)	100 ( 4,831)
11.26 ( 8)	19.71 ( 14)	45.07 ( 32)	100 ( 71)
4.68 ( 69)	3.26 ( 48)	2.64 ( 39)	100 ( 1,472)
7.69 ( 240)	15.28 ( 477)	63.58 (1,984)	100 ( 3,120)
5.48 (1,601)	5.40 (1,578)	8.88 (2,596)	100 (29,212)

延べ語数では、『夢』は1年生を除き記事文と叙事文のちょうど中間に分布する形で現れる。叙事文が全体的に最も高いが、この理由は、初出語の度数分布で6以上のものの割合を提示してみると、

	2年	3年	4年	5年	6年
記事文	5.3	2.8	1.3	1.5	2.0
叙事文	4.3	4.8	2.3	3.2	2.8
『夢』	5.4	2.2	1.6	0.9	0.5

となり、叙事文が2年生を除き最も高いことがわかる。それだけ初出語のうち、その学年に限ってしばしば使われる語が比較的多いということを意味し、結果、延べ語数もふえているものと思われる。

なぜ『夢』が中間に位置したか不明だが、これも今まで何度か確認された、両文章の中間の特徴の現れといえるか。

次に、品詞別では、『夢』は叙事文の分布にやや近い形で現れる。体の類の初出語の占める割合が高く、学年に連れて減少の仕方が激しいことは両者に共通するが、異なり語数で叙事文が『夢』同様、4年生から50%強の安定した初出語を保っていること、延べ語数に占める使用率も叙事文の数値(2年39%、3年29%、4年24%、5年24%、6年21%)の方が『夢』に近



〈表9〉 学年間にわたる共出現語

品 詞		共通学年間		6 学年間共通	5 学年間共通	4 学年間共通
体 の 類	異なり語数		% 語	2.15 ( 46)	2.71 ( 58)	4.35 ( 93)
	延べ語数			41.92 ( 5,535)	16.48 (2,176)	10.48 (1,384)
用 の 類	異なり語数			6.11 ( 33)	6.85 ( 37)	6.48 ( 35)
	延べ語数			69.80 ( 6,777)	16.42 (1,595)	4.59 ( 446)
相 の 類	異なり語数			6.41 ( 24)	13.36 ( 50)	6.95 ( 26)
	延べ語数			42.01 ( 2,034)	36.28 (1,753)	8.71 ( 421)
の そ の 他	異なり語数			9.85 ( 7)	7.04 ( 5)	7.04 ( 5)
	延べ語数			72.96 ( 1,074)	6.31 ( 93)	10.12 ( 149)
計	異なり語数			3.52 ( 110)	4.80 ( 150)	5.09 ( 159)
	延べ語数			52.78 (15,420)	19.22 (5,617)	8.21 (2,400)

『夢』	叙事文	記事文	延べ語	『夢』			叙事文	記事文	異なり語
				6 学年	5 学年	4 学年			
52.7	57.9	69.7	6 学年	3.5	4.6	6.8	6 学年	6 学年	6 学年
19.2	12.4	9.0	5 学年	4.8	4.5	4.3	5 学年	5 学年	5 学年
8.2	5.6	5.1	4 学年	5.0	4.1	5.3	4 学年	4 学年	4 学年
5.4	5.4	4.8	3 学年	7.6	7.3	7.7	3 学年	3 学年	3 学年
5.4	6.4	4.2	2 学年	15.2	14.7	15.6	2 学年	2 学年	2 学年
8.8	12.0	6.9	1 学年	63.5	64.6	60.1	1 学年	1 学年	1 学年

二・二・二 学年間にわたる共出現語  
 学年間にわたって、共通に使用された語彙の状況を示したのが表9である。

全体の数値を井上と比べてみると、次のようになる。

い。相の類と用の類を比べた場合、相の類がやや高い初出語数を示す叙事文に対し、記事文はすべての学年で用の類が高くなっている。この点では『夢』は学年に応じてばらつき、ちょうど中間的な分布といえなくもない。

なお、初出語の事例は省略する。

三者に共通して、6学年間共通して使用される異なり語数は5%前後なのに対し、延べ語数では50%を越える点、逆に、1学年のみの語は6割を越えるにもかかわらず、延べ語数では10%前後にとどまる点が確認される。これより、共出現の年数が多い語ほど基本的に重要なものであり、ある学年に特定のみにられる語ほど話題に応じて現れた臨時的、一回的なものであることがわかる。これは、国語研究所(一九八九)でもほぼ同様の結果であり、児童作文として文章ジャンル(文種)にかかわらず、学年間にわたる共出現語の分布型として認めることができよう。

『夢』の特徴として、6学年間共通の異なり・延べ語数ともに低い点を指摘できそうだが、ただ5学年間ではともに記事文・叙事文を上回っており、積極的にはいえない。むしろ、異なり語数の4学年間共通以下、延べ語数の2学年以下で、記事文と叙述文の間にあることを指摘しておくの方が有意のようである。

品詞別でも記事文・叙述文とほぼ同じ結果を得ている。6学年間共通で体の類が最も低い点、逆に1学年のみで体の類が7割近くを占める点、そのほか、用・相・その他の類の分布の基本的な姿は共通する。

6学年間共通する語彙を表10として示す。

『分類語彙表』にしたがって5分類してあり、井上(一九八四)の結果と比較すると、次のような比率になる。

	記事文	叙事文	『夢』
1 抽象的關係	54.9	54.4	36.6
2 活動の主体	8.1	11.9	20.5
3 精神・行為	34.5	24.4	33.0
4 生産用具	0.5	4.8	4.4
5 自然	2.3	4.4	5.3

『夢』の「人間活動の主体」の比率が高いことがわかる。自分の将来のことについて語るため、職業名・地位名などが自然に増え、そしてそれに関連する「生産用具」「自然」の語彙が多くなっていることがよくわかる。

なお、記事文、叙事文と『夢』が共通する語を表10で指摘したが、44語にのぼる。さらに、記事文とだけでは12語、叙事文とだけでは9語、合せて65語となる。これは『夢』112語のうちうど半数である。共出現語の分布型が共通すると同時に、児童作文では具体的な語もかなりの程度で共通する状況が理解できる。

### 三 まとめ

「ぼくのゆめ・わたしのゆめ」という課題で書かれた作文資

<表10> 6 学年間にわたる共出現語

分類	〔体の類〕 異なり語45、延べ語5,556 〔用の類〕 異なり語32、延べ語6,837 〔相の類〕 異なり語26、延べ語2,085 〔その他の類〕 異なり語 9、延べ語1,063
1. 抽象的 関係	事(389) 選手(277) 今(196) わけ(109) 物(100) 所(78) ため(55) どこ(27) <u>なる</u> (2,372) <u>いる</u> (585) <u>ある</u> (280) <u>行く</u> (224) <u>なれる</u> (157) <u>できる</u> (149) <u>あげる</u> (122) <u>来る</u> (107) <u>出る</u> (103) <u>入れる</u> (29) 出す(21) <u>いい</u> (354) <u>大きい</u> (185) <u>いっぱい</u> (116) <u>いろいろ</u> (118) <u>たくさん</u> (107) <u>はやい</u> (98) <u>いろんな</u> (73) <u>どうして</u> (59) <u>いけない</u> (44) <u>とっても</u> (39) <u>とても</u> (34) <u>大変</u> (32) <u>むずかしい</u> (31) <u>偉い</u> (16) <u>そして</u> (331) <u>でも</u> (317) <u>だから</u> (119) <u>それに</u> (104) <u>それから</u> (41) <u>だって</u> (37) <u>それで</u> (24) <u>それと</u> (23)
2. 人間活動 の主体	わたし(698) <u>ぼく</u> (604) <u>先生</u> (418) <u>人</u> (294) <u>皆</u> (150) 子供(112) <u>大人</u> (106) <u>お母さん</u> (96) <u>自分</u> (93) <u>学校</u> (91) 看護婦(90) <u>お父さん</u> (81) <u>ケーキ屋さん</u> (51) <u>お客</u> (41) パン屋(39) <u>おもちゃ屋</u> (37) <u>お菓子屋</u> (35) <u>友達</u> (34) 社長(30) 医者(20) 嫁(13)
3. 人間活動 一精神・ 行為一	夢(389) <u>野球</u> (164) <u>仕事</u> (96) <u>サッカー</u> (93) <u>勉強</u> (77) 絵(35) <u>スポーツ</u> (23) <u>チーム</u> (23) <u>赤ちゃん</u> (20) <u>する</u> (737) <u>見る</u> (314) <u>言う</u> (299) <u>作る</u> (213) <u>やる</u> (207) <u>がんばる</u> (152) <u>教える</u> (100) <u>しれる</u> (84) <u>もらう</u> (80) <u>わかる</u> (80) <u>習う</u> (53) <u>買う</u> (52) <u>食べる</u> (49) <u>決める</u> (47) <u>持つ</u> (45) <u>くれる</u> (40) <u>売る</u> (34) <u>直す</u> (30) <u>勝つ</u> (28) <u>つかまえる</u> (27) <u>おこる</u> (17) <u>好き</u> (208) <u>おもしろい</u> (75) <u>大好き</u> (65) <u>楽しい</u> (68) <u>かわいい</u> (46) <u>いっしょ</u> (46) <u>ほしい</u> (39) <u>こわい</u> (19) <u>やっぱり</u> (67)
4. 生産用具	ピアノ(98) <u>ケーキ</u> (69) <u>テレビ</u> (38) <u>車</u> (36) <u>プール</u> (16)
5. 自然	花(72) 病気(30) <u>うまい</u> (83) <u>かっこいい</u> (49) <u>おいしい</u> (41) <u>きれい</u> (40)

(注) ( ) は使用度数

下線のある語は記事文・叙事文・『夢』の三者に出現するもの

料を、「べんきょう」「日曜日のできごと」と比較し述べてきたが、児童作文としての大きな枠組みは変らなかつた。品詞構成比(二・一・二)、異なり語数と延べ語数の関係(同)、6学年間の全体の累積使用率(二・一・三)、初出語がその学年で占める割合(二・二・一)、共出現語の分布型(二・二・二)と、骨格にあたる部分は三者ほぼ共通した動き、分布を示した。このことより、「生活文」という文章ジャンルであり「表出・創作」という文章機能を有する文章が児童の手により記された場合、ほぼ同様の文体的特徴を持つと位置付けてよいのではなからうか。

そのような中で、低頻度語彙の比率が高いこと(二・一・三)、初出語の度数分布が高いこと(二・二・一)などにもなるように、明らかに『夢』というテーマの性格を投影したような結果も得られた。また、記事文と叙事文との中間的な現れをみせるものもあれば、同時に記事文と共通する面をみせるものもあつた。この『夢』の文章としての位置付けは今後の課題として残し、ここでは三者の文章としての共通性と、実際に書く児童の違いを越えたところではほぼ共通の結果が得られた事実を指摘するにとどめる。

(注1) 作文ジャンル、文章の機能については、国語研究所(一九八九)による。

(注2) 中田(一九九二)の語彙表では品詞分類を、三省堂国語辞典第3版

(一九八二年刊)に概ね準拠している。

(注3) MVRとは、動詞で、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の合算を割って百をかけたものである。

国立国語研究所(一九六四)『現代雑誌九十種の用語用字』(秀英出版)

国立国語研究所(一九六四)『分類語彙表』(秀英出版)

野村雅昭・柳瀬智子(一九七九)『児童読み物の語彙構造』(『計量国語学』第12巻2号)

井上一郎・児童言語ゼミナール(一九八四)『作文の語彙』(文教国文学14号)

国立国語研究所(一九八九)『児童の作文使用語彙』(東京書籍)

中田 敏夫(一九九二)『児童作文接続詞にみる男女差』(金沢大学教育紀要人文科学・社会科学編40号)

中田 敏夫(一九九二)『児童作文の語彙に関する研究——語彙表——』(愛知

教育大学研究報告41輯人文科学編)

中田 敏夫(一九九二)『児童作文の語彙に関する研究——語彙表——』(愛知

教育大学研究報告41輯人文科学編)